連載 世界お茶事情

ブラジルのお茶の歴史

Escola de Chá Embahú 創設者　ユリ・ハヤシ

はじめに

世界中に数ある茶生産国の中ではまだ比較的知られていないものの、この飲み物と親密で歴史的なつながりのある国－ブラジル。ブラジルのお茶の歴史は断片的ですが、東洋と初期の植民地時代の影響を受けて根付いた茶生産の伝統があります。一杯のお茶は、美しく貴重な液体というだけでなく、文化遺産を反映したものであり、国家の歴史を形作ってきた社会的・経済的な出来事を支えてきたものでもあります。

本稿では歴史的な文書からの広範囲の調査で得た情報をジグソーパズルのように組み立てた結果を紹介しながら、これまでほとんど調査されてこなかった、ブラジルでお茶がたどってきた歴史の手がかりを明らかにしていきます。

植民地時代のブラジルと中国茶

1500年のブラジル発見後、ポルトガルはこの広大で肥沃な土地の植民地化を始めました。その後数世紀にわたってヨーロッパの貴族がブラジル文化に影響を及ぼします。また、嗜好品としてのお茶に目をつけたポルトガルの王は、お茶の種を所望し、中国から労働者をブラジルに送るように命令しました。お茶の種が最終目的地であるリオデジャネイロに到着すると、その一部は、現地調査と研究所の役割を持つ市内のリオデジャネイロ植物園へと運ばれました。種は中国人移民によって管理され、その中国の品種は新しい環境にとても良くなじみ成長しました。

1822年、数年間の国内外の混乱を経てブラジルはポルトガルからの独立を勝ち取りました。ブラジルの初代皇帝ドン・ペドロ一世はこの新しい国が価値のある品、茶を持つ豊かな国だと認識しました。

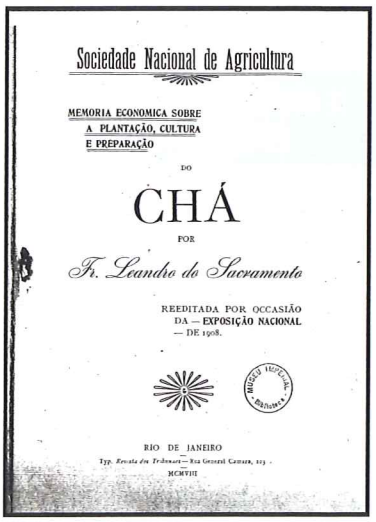
1824年、リオデジャネイロ植物園の新しい園長にフレイ・レアンドロ・ド・サクラメント(Frei Leandro do Sacramento)が任命されました。フレイは、限られた一握りの中国人労働者しかいない状況で過度に成長した事実上の植物園内の放棄茶園に直面しました。中国人コミュニティーの大半は、農業より稼ぎが良いとみて他の商売の機会を求めて去っていたのです。ドン・ペドロ一世からの要請により、フレイはお茶の木や栽培に関する詳細な資料を作成しました。その資料はお茶の栽培に興味を示した他の州の人のたちに、お茶の種と一緒に送るためのものでした。

これをきっかけに、ブラジル全土に茶の生産と文化を広めることを目的としたプロジェクトが始まりました。当時、その試みは利益をもたらす可能性がありました。この構想のもと、フレイからの支援を受けながら、茶の生産における機械の輸入と人員の採用をも含む計画が作成されました。しかし大きな不運によって計画の実行は中止されてしまいました。1829年、フレイ・レアンドロが他界してしまったのです。

こうした一連の出来事がリオデジャネイロで起こっている間、リオデジャネイロ植物園から採取したお茶の種を使って、サンパウロ州とミナスジェライス州でも茶園の開発が行われま

ユリ・ハヤシ　プロフィール

幼い頃からお茶に熱中し、2013年からお茶を教える。これまでに受講した茶愛好家や起業家はブラジル全土で数百人に上る。外部講演や試飲会、ビジネスの立ち上げ、プレス記事への寄稿のコンサルタントとしても精力的に活動。ブラジルの茶園支援を目的に初のガイド付きお茶ツアーや、ブラジル茶製品の非営利ナショナルアワードなど、前例のないプロジェクトも行ってきた。
現在、ブラジルのお茶文化の歴史に関する本を執筆中。



Sociedade Nacional de Agricultura

MEMORIA ECONOMICA SOBRE A PLANTAÇÃO, CULTURA E PREPARAÇÃO DO

CHÁ

POR

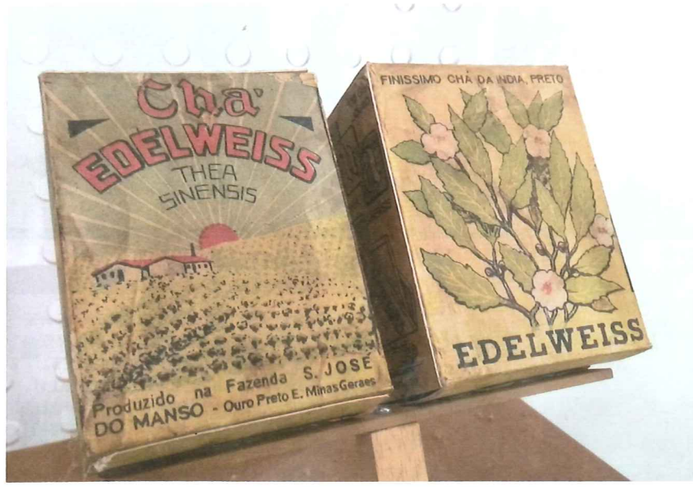
Fr. Leandro do Sacramento

REEDITADA POR OCCASIÃO DA — EXPOSIÇÃO NACIONAL — DE 1908.

RIO DE JANEIRO

MCMVIII

フレイ・レアンドロ・ド・サクラメントのお茶マニュアル



ミナスジェライス州のお茶ブランド(1930)

した。しかし製造工程の知識不足、コーヒー市場の成長や都市部の拡大によって2つの州にお茶の文化は深く根付きませんでした。

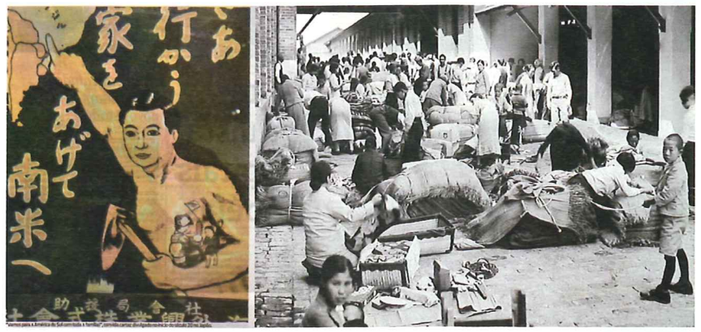
このような障害があったにもかかわらず、サンパウロ州は1850年頃には3万kgのお茶を輸出していました。そして1862年、ミナスジェライス州にあるバロン・デ・カマルゴの宝の農園(Baron de Camargo's treasurer's farm)から、ロンドン万国博覧会に出品するためにお茶のサンプルが送られ、ブラジルのお茶として史上初めての受賞を果たしました。

共和国としてのブラジルと日本からの移民

1888年、奴隷制の廃止とともにお茶の生産も事実上消滅しました。それからわずか130年後の現在、共和国として統治されているブラジルでは、コーヒー労働者としてやってきた外国人のおかげでお茶が息を吹き返しています。ブラジルではコーヒーが大きな産業に成長したものの浮き沈みがあり、外国人労働者の中にはお茶をコーヒーの低迷期の収入を補う手段として考える人たちがいました。

それは20世紀に始まった日本からの移民も同様でした。彼らの多くは、日本での仕事を捨て見知らぬ国に機会を求めました。しかし異なる食べ物、気候、そして全く対照的なブラジルの文化に適応するのは容易ではありませんでした。それはほとんどの移民にとって同じでしたが、とりわけ日本人には難しかったようです。日本人移民は、祖国に帰ることを前提にコミュニティーの中で生活し日本文化を維持しようとしました。しかし、なかなか増えない貯蓄と第二次世界大戦での壊滅的な結果を受け、祖国に帰る希望を諦め、ブラジルの土地で家族のためにより良い未来を築くことに集中しました。

1922年、サンパウロのヴァーレ・ド・リベイラにある日本人移民コミュニティーの中に、日本茶業界出身のお茶のプロであるトラゾウ・オカモトがいました。同年、トラゾウは自分の土地でお茶の木を栽培するために、茶畑のあった民間の農園から、サンパウロのダウンタウンにある陸橋Viaduto do Chaを経由してお茶の木を持ち込みました。そのお茶の品種は「中国のお茶」(Tea of China)として知られ、日本人に人気の緑茶に理想的な品種だと言われていました。トラゾウは、地元のコミュニティーに行き渡る程度の少量生産を試験的に始めました。しかし彼は、欧米と大量に取引するためには紅茶を作る必要があることに気づいていました。自身が立てた計画を実行するために投資をし、日本を訪れた際にブラジルに戻る途中で立ち寄ったスリランカのセイロンで大胆な行動に出ました。セイロンには、「インドのお茶」(Tea of India)として知られる別の茶の品種があることを知っていたトラゾウは、その種を入手してパンの中に隠し持ち帰ったのです。およそ2カ月間の旅を終えてレジストロ市に着いた時、彼が持っていたのは種ではなく小さなお茶の木でした。これがブラジルのお茶の黄金期の始まりでした。



日本人に向けたブラジルの広告(左)、
日本人移民のブラジルへの到着(右 出典:Museu Histórico da Imigração Japonesa, 1908年)

トラゾウは、持ち帰った品種(カメリア・シネンシス・アッサミカ)の栽培に成功しました。その要因は、大西洋岸森林に位置する「ヴァーレ・ド・リベイラ」の、高温多湿で一定の雨量がある気象条件にありました。この成功により、その地域に住む他の移民たちも茶を生産するようになり、レジストロ市は、ついには「ブラジルのお茶の首都」(Brazilian Tea Capital)の称号を得ました。1950年から1990年までの数十年間、レジストロ市には45軒ほどの茶工場といくつかの畑がありました。その間、地元で生産された紅茶は政府からの助成金や外国資本を利用して、中南米やヨーロッパ、北米に輸出されていました。

しかし時が経つにつれて、問題が生じるようになりました。一部は、90年代の新大統領誕生や、大統領弾劾、新通貨レアルの導入といった政治に関連するものでした。他の問題はイノベーションの欠如や新技術の遅れに起因するものでした。最後に、人的な要因も見過ごせません。日本人移民は、日本人居住地から従来型の都市に移り、資本主義や新たな考え方、行動様式がもたらされ、かつてのような強固な結束感は弱まりました。

こうした問題が重なり、ついにはブラジル国内の茶産業の黄金時代は終わりを迎えました。巨大な経済危機や輸出の大幅な減少によってほとんどの茶工場は閉鎖に追い込まれ、残ったのはわずかでした。今日、レジストロ市にはアマヤ家が保有するたった一軒の茶工場と、シマダ家とヤママル家の二つの小さな茶畑だけが残っており、職人が少量のお茶を生産しています。サンパウロ州の西部では、日本企業の山本山の支社が主に輸出用に日本茶を生産しており、ブラジルのお茶の全盛期から現在まで日本本社とつながっています。

アマヤ家の茶園
(2019年のEscola de Chá Embahú主催のお茶ツアーにて)

ブラジルの茶生産者紹介

アマヤ・ティーズ (Amaya Teas)

アマヤ家は、シュテキシ・アマヤ、ナオ・アマヤ夫妻と3人の息子であるホルヘ、ヘリオ、アントニオ・デ・メロが1919年にブラジルに渡ってきました。アントニオは、日本人で初めて医学の学位を取得した経歴を持ち、サンパウロ市のサンタ・クルス病院設立の際には重要な役割を果たしました。また日本大使館で働いた経験もありましたが、三人の息子の中で、彼が一家のお茶作りの牽引役でもありました。アントニオはリオデジャネイロ植物園を利用してお茶の木を研究し、まだお茶への関心が低い時代に、お茶にビジネスとしての興味を持つようになりました。アントニオがお茶の知識を身につけた結果、アマヤ家は1936年、サンパウロ州のレジストロ市で手をかけて生産したお茶「Chá Ypiranga」を主にリオデジャネイロで販売しました。

未経験だったお茶の栽培と製造を始めてからの数年間に、市場の動きに対応するために設備の改良を行い、その他様々なことを体験しました。当初アマヤ家の茶園は最大数千tものお茶を作ることが可能でしたが、需要の減少に伴い、現在ではその容量の半分しか製造していません。最悪の時期にはやめようと考えたこともありましたが、再度奮起して現在の国内外の市場に対応するために再編成を行いました。

ヴァーレ・ド・リベイラにある広大なアマヤ家の畑は、マタ・アトランティカ(大西洋の森:ユネスコの世界遺産)とリベイラ・デ・イグアペ川に隣接しています。80年以上の伝統を持つアマヤ家の茶園は、ブラジルで最も古い家族経営の農園の一つです。

【詳細情報】

アマヤ・ティーズは、非オーソドックス製法の紅茶や、ウーロン茶、緑茶、粉末緑茶を製造。畑の面積は290ヘクタールあるが、お茶が栽培されているのは72ヘクタールに過ぎない。(他の72ヘクタールはいまだに放置されている)。残りの146ヘクタールは自然保護区。最終製品としてのお茶の年間生産量は90t。2020年10月までに、農業畜産食料供給省(Ministry of Agriculture, Livestock and Supply)からブラジルの有機認証を取得する予定。機械はVSTPシステム(Vertical Sniechowski Tea Processing)をベースに、内製でカスタマイズも行っている。お茶の葉は、保存パウチやティーバッグでブラジル全国の店舗にまとめ売りされている。

●アマヤ・ティーズのウェブサイト
https://chasamaya.com.br/

シマダのお茶製造
（2019年のEscola de Chá Embahú主催のお茶ツアーにて）

シチオ・シマダ（Sitio Shimada）

93歳のカリスマ的なおばあさん、ウメ・シマダさんは収穫したお茶を近隣の工場に売って生活をしてきました。しかし、お茶市場がこれ以上ウメさんのお茶を買う余裕がなくなった時、彼女はある重大な決断をしました。2014年、家族の小さな茶畑を失いたくなかったウメさんは自分自身でお茶の製造を始めることを決めたのです。トミオ・マキウチさんの協力により、ウメさんは敷地内に小さな紅茶の製造施設を作りました。

この場を借りて、お茶の愛好家であり、今日のお茶文化に大いに尽力したトミオ・マキウチさんについても紹介しなければいけません。レジストロ市にある彼の自宅には彼のたくさんの発明品がありますが、その一つにミニ紅茶工場があります。この縮小モデルの工場ではおよそ5kgのお茶を製造することができます。そして未来を見据えているトミオ・マキウチさんには、地域の茶生産が復活し以前のように経済が安定する姿が見たいという願いがあります。その願いを持って、新たな機会を作るだけでなく、次世代のお茶愛好家を感化する方法として、子供たちにお茶の生産について教えています。

シマダ家で見つかった設備はトミオさんが修復しました。それらの機械は、レジストロ市のお茶作りが始まった時からあります。ウメさんの娘テレジンハ・シマダ（Terezinha Shimada）は、トミオさんからお茶の製造技術を学び、現在はシマダ家の土地で収穫されたお茶の製造は彼女が担当してします。

【詳細情報】

シマダ家によって製造されたお茶（白茶、紅茶、緑茶）は、「おばあ」「おばあちゃんのお茶」（Obatian, o chá da vovó）として知られ、ウメさんに敬意を表して名付けられた。ウメさんの紅茶は、修復されたお茶の揉捻機や乾燥機と薪釜を使って、伝統的なオーソドックス製法で作られている。茶園は約5ヘクタールの敷地内にあり、2つのエリアに分かれている。そのうちの1つは、お茶の特別な風味に貢献するライチ農園の近くにある。年間最大生産量は400kgほどと推定されるが、需要が低迷しているため、実際はその半分しか生産されていない。シマダ家の茶園は、農業畜産食料供給省（Ministry of Agriculture, Livestock and Supply）から有機認定を取得している。

●シマダ家のウェブサイト
www.sitioshimada.com.br

シチオ・ヤママル（Sitio Yamamaru）

ヤママル家はお茶とは長い付き合いがあります。1953年にブラジルにやってきて、お茶作りの原点となる土地を手に入れました。ヤママル家の長男、ミツトシ・ヤママルは腕のいい日本建築の大工でしたが、仕事が忙しかったため息子のカズトシに一家のお茶生産を任せました。

1992年にブラジルでお茶が危機に直面した時、ヤママル家は8ヘクタールの茶畑を保有しており、そこでは7人の従業員が家族とともに住み込みで働いていました。製造は地域の大きな工場に引き継ぎましたが、お茶の市場がないため家族は生産を中止せざるを得ませんでした。この時、土地と機械の大半は他に貸し出され、その土地は、2008年になってようやく取り戻しました。2011年、カズトシは放置された茶園の再生を始めました。森全体が拡大してお茶の木々を囲んでいたため、「アグロフォレストリー・システム」（木々の間で農作物を育てる手法）を導入せざるを得ず、ハート・オブ・パーム（ヤシの新芽）などの他の栽培も取り入れました。

カズトシの妹のミリアムは、2017年に日本に行き、日本茶の手揉みの工程を学びました。ミリアムは帰国後、それを簡易化した方法で緑茶作りを始めました。

【詳細情報】

現在、ヤママル家は少量の緑茶と紅茶を生産。およそ12ヘクタールの「アグロフォレストの茶園」を所有している。2019年には30kgの緑茶を生産し、2020年は合計で60kgの緑茶と5kgの紅茶を生産予定。ヤママル家は今後市場で需要が増えたときに備え規模を拡大するつもりである。ヤママル家の敷地にはまだ放置茶園が残っている。

ヤママル家のアグロフォレストの茶園
（2019年のEscola de Chá Embahú主催のお茶ツアーにて）

サンパウロ州の山本山の工場（2017）

ヤマモトヤマ ブラジル（Yamamotoyama do Brasil）

山本山は、1690年創業の日本の伝統的なお茶の会社です。1970年、お茶の市場が解放されたタイミングに合わせて、9代目社長の山本邦一郎に率いられてブラジルに進出しました。邦一郎は、高品質のお茶を世界に届けるという目的を追求した結果、サンパウロ州サンミゲル・アルカンジョで、日本茶の栽培に最適な環境を見つけました。邦一郎の計画を達成するために、日本の品種であるやぶきたと日本製の機械が日本から運ばれました。

【詳細情報】

現在、ヤマモトヤマ ブラジルは10,425ヘクタールの茶園を保有し、年間1,530tの生葉を収穫している。そして煎茶、番茶、玄米茶、ほうじ茶などの日本茶や、白茶や有機の緑茶を生産しており、その大半を輸出している。

今日のブラジルとスペシャリティ・ティー（specialty tea）の文化

お茶の黄金時代を経て、ブラジルの茶産業は、国内の小さな市場に恐々としながらも生き残ってきました。歴史的にブラジル人に最も好まれてきたのはコーヒーで、その次はマテ茶や他の植物から作られたお茶です。純粋なお茶はブラジル人の口には合わず、主にはブラジル東部の人々の間で飲まれていました。

幸運なことに、過去10年間にスペシャリティ・ティー（specialty tea）への関心と、近年の健康管理への意識と必要性が高まったおかげで新たな市場が生まれました。これをきっかけにビジネスチャンスが生まれ、新しいブランドが登場し、国際的な企業がお茶に注目するようになりました。これらのブランドは輸入商品を扱っており、高品質であることを体験してもらうために必要な試飲会などのお茶の普及活動に投資しています。

最後に

私は2007年から茶の研究に携わり、2013年からお茶の授業を行っています。その経験から、市場はまだ成長していると言えると思います。市場拡大の道のりは一本道ではなく混沌としていますが、ブラジル人たちの進化した味覚は後戻りすることはないでしょう。

2014年、ブラジルのお茶とその歴史を深く知って興奮した私は、国内産の茶に以前よりも関わるようになりました。そして、ブラジルのお茶は正しく評価されていないことを痛感しました。ハーブティーを含むブラジルのスペシャリティ・ティーの市場は2013年から2018年にかけて25％成長し、過去2年でこれらのフランチャイズの増加率は37％以上と、以前とは状況が変わりました。この拡大の動きは茶飲料やティーバッグのお茶にも見られます。

本稿は私たちの熱帯の土地でのお茶文化を、みなさんにより理解してもらおうと書いたものです。また、私はブラジル初の茶教育機関であるお茶の学校Escola de Chá Embahúを通じて茶の専門家の育成も行っています。私たちの使命は、茶に関する知識を広め、お茶の豊かな文化や哲学、知覚経験に気づいてもらうことです。そして、ブラジル全体のお茶の発展を目的としたイベントやコンテスト、取り組みを通じて市場を活性化していきます。

Escola de Chá Embahúのお茶の授業風景（2020）